

## 演題 6

## 脳神経系疾患の手術を受けた高齢者の看護の実際と課題の検討

キーワード：脳神経系疾患 高齢者 術後看護

○金子史代<sup>1)</sup>、倉井佳子<sup>1)</sup>、五十嵐恵<sup>2)</sup>、吉村友里<sup>2)</sup>、児玉直子<sup>2)</sup>新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科<sup>1)</sup> 桑名恵風会桑名病院<sup>2)</sup>

## I 目的

脳神経系疾患の手術を受けた高齢者は、術後に意識障害が遷延することが多く、急性期においても認知症状が出現しやすいために離床が遅れて術後肺炎を合併しやすい。そこで、これらを予防し術後の回復を支援するには、高齢者の個別性を考慮した日常生活動作の拡大とセルフケアへの支援が重要となる。本研究では、脳神経系疾患の手術を受けた高齢者への看護の実際から、高齢者に必要な看護と課題を明らかにし看護の方向性を検討することを目的とした。

## II 研究方法

1) 調査期間は、平成 24 年 8 月から 9 月。2) 対象者は、A 総合病院の急性期病棟で脳神経系疾患の手術を受けた高齢者を看護している看護師 6 名。3) 方法は、対象者への半構造化面接法による聞き取り調査から得たデータを KJ 法により分析した。質問項目は、脳神経系疾患の手術を受けた高齢者の術後の日常生活動作の拡大およびセルフケアへの支援の実際についてである。面接は 1 名に 1 回実施し、静かでプライバシーが保持できる環境で会話をする方法で行った。面接時間は 30 分前後を目標とした。4) 倫理的配慮は、対象者に文章と口頭で研究の目的・方法・参加の自由と拒否権、参加・不参加による不利益はないこと、逐語録の作成と結果の発表、それに関連する個人情報の保護等を説明し同意書をもって同意を得た。

## III 結果

対象となった看護師 6 名は急性期病棟に 5 年から 10 年勤務している。面接時間は平均 38 分であった。逐語録からとりだしたラベルは 107 であった。脳神経系の手術を受けた高齢者の日常生活動作の拡大およびセルフケアへの支援について 6 回のグループ編成を繰り返し共通する意味内容ごとに分類した。その結果 7 つのシンボルマークに分類された。これら 7 つシンボルマーク【 】の関係性をみると、その基盤には術後の治療や処置を優先し患者の観察と安全を中心にした【高齢者の脳神経系の手術治療の効果を高める看護】と看護師と各医療職の情報の共有によりそれぞれが役割を果たす術後のチーム医療として【他の医療職との連携と協働】があった。そして、高齢者の環境への適応と回復力、脳神経系の手術による合併症（麻痺や意識障害、認知の低下等）から【高齢者の特徴と脳神経系の手術により生じる高齢者の変化】を把握して、高齢者の可能性を見出し、もとの生活に戻す、社会に送り出すという【脳神経系の手術を受けた高齢者の看護の目標】に向けて援助を進めていた。看護師は、

脳神経系の術後の高齢者の日常生活動作の拡大を排泄と食事のセルフケアから支援する【高齢者の自立と自律への支援】を行っていたが、その過程で、点滴の自己抜去、徘徊による転倒などの予防の必要性から【術後の高齢者の安全を守る抑制、その行為による（看護師の）心の痛み】を経験していた。また、脳神経系の手術を受けた高齢者の症状による家族の戸惑いと、それにより変化する患者との関係に対応する【高齢者の術後の回復意欲と認知能力を支える家族への支援】があった。そして、看護師は脳神経系術後の高齢者の看護の過程における課題として、高齢者の退院に向けた各職種間の合意の必要性、高齢者の家族の介護力を引き出す関わりをあげていた。また、高齢患者の安全を守る抑制の時間を短縮する方法や方向性を決定しつつも実践への実現の困難を述べていた。

## IV 考察

脳神経系疾患の手術を受けた高齢者の看護では、看護師と各医療職の情報の共有によるチームとしての効果的な連携と協働が重要となっていた。特にチームで共有する高齢者の病状や回復に関する情報は、各職種の専門的な役割をより有効に機能させるために重要な要素となっていることが伺えた。急性期病棟の医療チームが共有するこれらの情報は今その時に高齢者の医療に活用しうる情報であり、また、高齢者の可能性を見出し、もとの生活に戻す、社会に送り出すために生かされるべき情報でもある。このことから、チームが共有する情報は、高齢者の退院にむけてチームで活用しうる情報ともなりうるものと考ええる。

また、看護師は、医療チームの情報の共有を通して、各職種が、高齢者の術後の意識障害や認知の低下に揺さぶられている家族に関わり、その機能を発揮できるように調整する必要がある。そして、高齢者の安全を守る看護師による抑制の行為も、医療チームで、術後の高齢者が動くことができる機会と範囲の確保を検討し、高齢者の安全を医療チーム全体で守る方法を構築することも責任ある看護の実践に必要と考える。

## V 結論

脳神経系疾患の手術を受けた高齢者の看護では、看護師と各医療職の情報の共有によるチームの効果的な連携と協働が重要となる。責任ある看護の実践には、高齢者の退院に向けた職種間の合意、術後高齢者の意識障害等に揺さぶられている家族の介護力を引き出すかわり、高齢者の安全を守る看護師による抑制の行為を少なくする援助を、医療チーム全体で情報の共有を通して検討する必要性が示唆された。